



▲ 令和6年11月に開催された「みんなの秋祭り」。風物詩である総踊りや、9年ぶりに復活した花火が祭りを飾った

—— 当たり前の日常、再び ——

益城町が直面した困難は、熊本地震だけではありませんでした。震災の傷も癒えぬまま、「新型コロナウイルス感染症」の感染拡大によって人々は行動を制限され、多くの行事が中止を余儀なくされました。

しかし、町は復旧・復興の歩みを止めることなく、新型コロナウイルスにも迅速に対応。感染対策やワクチン接種事業、各種助成を推進し、一日も早い日常の回復に努めました。

こうした努力が実を結び、町に再び活気が戻り始めます。震災やコロナ禍の影響により、長らく中止されていた「益城町『阿蘇くまもと空港・テクノ周辺』ジョギングフェア」や「きままにスポーツ・健康フェスタ」、「益城公認ロードレース大会」などのスポーツイベントが次々と復活。町民の思い出を彩り続けた夏祭りは「みんなの秋祭り」としてリニューアルし、あの頃のにぎわいがようやく帰ってきました。

そこに広がる町民の笑顔こそが、当たり前の日常を形作ります。



▲ 第33回 益城町「阿蘇くまもと空港・テクノ周辺」ジョギングフェア

—— 暮らしをもっと便利に、もっと楽しく ——

急速に変化する時代に合わせ、行政も進化が必要です。町は行政改革の一環として、各種サービスや業務のDX(デジタルトランスフォーメーション)を推進しています。具体的には、手続きの簡素化や行政文書のペーパーレス化により「書かない・行かない窓口」を推進。さらに、公式ホームページやLINEアカウントをリニューアルし、インターネットを通じた情報発信を強化するとともに、電子予約・申請の段階的な導入も進めています。



リニューアルした公式HPとLINEアカウント ▲



木山交通広場からも発着する「のーとUMEらいん」 ▶



また、人手不足やニーズの多様化といった課題に対応するため、最新AIの活用も試験的に開始しました。予約に応じて運行ルートを自動設定するAIオンデマンドバス「のーとUMEらいん」の運行や、生成AIの業務活用はその一例です。

これらのデジタル技術を最大限に活用し、時代のニーズに応え、日々の暮らしをもっと便利で楽しくなるような行政サービスの実現を目指します。

この他の事業の進展状況などは、町ホームページで公開しています。

問 企画財政課 復興企画係 ☎ 286 - 3223



～町長マニフェスト進展状況～

もっともっとわくわくする まちづくりは新たなステージへ

西村町政3期目も、いよいよラストスパートです。来年は熊本地震から10年という大きな節目を迎えます。この4年間、町民の皆さまと共に進めてきた施策の一部と、その成果を紹介します。

—— 熊本地震からの復旧・復興 ——

令和7年4月、公共施設の復旧として最後となる「地域共生センター カタル」がオープンし、熊本地震からの復旧は一つの区切りを迎えました。

時を同じくして、町の新たな交通拠点「木山交通広場」の運用が始まり、都市計画道路「益城東西線」の一部区間も開通。さらに、「益城中央被災市街地復興土地地区画整理事業」では宅地の引き渡しは全体の5割を超え、復興のシンボルである「県道熊本高森線4車線化事業」も年度内の全線供用開始を予定しています。これらの事業の進展は、町の復興をますます加速させ、さらなる活気を生み出しています。



この基盤を土台として、町の新たな価値を創出する次のステージへとつなげていきます。

◀ 地域の憩いのラウンジとしても好評
地域共生センター カタル

—— 災害に強いまちづくり ——

二度の震度7という経験は、私たちに多くの教訓を残しました。それらをまちづくりの礎とし、全国に先駆ける「災害に強いまちづくり」のモデルとなるべく、ハード・ソフト両面からの施策を推進しました。

ハード面では、幅員の狭さが緊急車両の通行を妨げた反省から、十分な幅員を持つ「避難路」を計画的に整備。災害時に避難地となる機能を備えた「防災公園」もその一つです。これらは単なるインフラ整備にとどまらず、町民の命を守る確かな備えとなります。

ソフト面では、行政による「公助」だけでなく、「自助」と「共助」の精神を育むことに注力しました。地域防災の核となる自主防災組織の活動支援や、実践的な「総合防災訓練」などを通じて、町民一人一人が災害に備える意識と、地域コミュニティを中心とした防災意識の醸成をこれからも継続していきます。



◀ 防災倉庫やかまどベンチなどを備えた防災公園

▼ 令和7年2月に行われた町総合防災訓練。実践さながらの救助訓練や、町民参加型の訓練、防災用品の展示などが行われた

